

東日本大震災津波復興特別委員会現地調査【陸前高田市】

令和元年11月14日 12:30~14:00

11月15日 14:00~15:30

東日本大震災津波伝承館の取組状況等について

1 説明聴取、視察先

東日本大震災津波伝承館

2 出席者

東日本大震災津波伝承館 副館長 熊谷 正則

副館長 立花 起一

3 概要

現 状 取 組 状 況 等	(東日本大震災津波伝承館) <ul style="list-style-type: none">・ 9月22日に開館し、台風の際に1日だけ休館し、11月14日で53日の営業となる。・ 11月14日までの入館者が67,430人で、単純に営業日数で割ると1,300人程度である。日曜日の入館者が多く2,000人前後、土曜日が1,000人前後、平日が500~800人程度で推移している状況である。今週末で7万人台になることを期待している。・ バスの駐車場が広いため、トイレ休憩を兼ねた立ち寄り場所として入館する方も多く、団体予約で把握している以外にも、団体のツアーのお客が多く来館している状況である。土日は、子供連れの家族がドライブで立ち寄っている印象がある。
質 疑 ・ 意 見 交 換	(1) 11月14日 <ul style="list-style-type: none">・ 県内の生徒に対する復興教育について・ 来館者の動向等について・ 物販について・ 来館者からの要望等について・ 館内の見学時間について・ 緊急時の避難場所について・ 伝承館の資料について・ 伝承館の展示物について (2) 11月15日 <ul style="list-style-type: none">・ 全国、世界へ伝える仕掛けについて・ リピーターを増やす取り組みについて・ 他の被災地への誘導について・ 津波の教訓を活かした展示について・ 避難路の伝え方と遺構の周遊について・ 寄附の現状、アンケート調査の実施について

4 質疑・意見交換

(1) 11月14日

○ 県内の生徒に対する復興教育について

(ハクセル美穂子委員)

校長先生であった立花副館長が東日本大震災津波伝承館にいるということは、これから県内の学校と復興教育に取り組まれるものと思う。修学旅行、グリーンキャンプなど形は色々あると思うが、県内の学校の生徒たちに対して、復興教育をどのような計画で進めていく考えか。

(立花起一副館長)

県外の高校生は、民泊で陸前高田市に何百人も来ているが、県内では、小学校と中学校、高校は特に復興教育に取り組んでいる学校に来館していただいている。

地理的、時間的、交通費などの問題があり、なかなか難しい状況であるが、県内の高校の校長先生方には、会合等の機会に当館を紹介し、復興教育で活用して欲しい旨お願いをしている。

当館は見学するだけでも勉強になるが、先日赤崎中学校の生徒が来館し、HUG（避難所運営ゲーム）の研修をセミナールームで行った。見学だけでなく、復興教育、避難所運営などの研修場所としても利用してもらえないかと考えている。課題としては、当館まで来てもらえるかということである。その辺の問題がクリアできれば、復興教育に対して、有効な学習施設であると思っている。

(ハクセル美穂子委員)

本日、初めて見学させていただいたが、この施設は県内の子供たちにしっかり見ていただくべきものだと思う。私の地元の雫石町の小学校は仙台市に修学旅行に行くが、その行程の中で、この施設に寄りながら行くなど、組み込んでもらえるといいと思う。子供たちにとっては、一生ものの経験、体験ができると思うので、是非、内陸部の小学校の修学旅行の行程に組み込んでいただけるような取り組みをお願いしたい。

○ 来館者の動向等について

(千葉秀幸委員)

初めて来館したが、震災を風化させてはいけないと思った。二つほど質問するが、一つ目は、来館者は主にどのあたりの地域から来ているのか、傾向的に把握しているのであれば教えていただきたい。

二つ目は、東日本大震災津波伝承館だけを見て沿岸周りをするのか、それともそのまま陸前高田市に宿泊されているのか、分かる範囲で教えていただきたい。

(熊谷正則副館長)

来館者については、今後、アンケート調査をして詳細に把握したいと考えている。

現時点の印象になるが、時々、駐車場の車のナンバーを確認しているが、6～7割が県内ナンバーで、それ以外が他県ナンバーである。他県ナンバーの中では宮城県が多く、三陸道がつながり気仙沼市まで40分もかからないことから、宮城県からの来館者が多いと思われる。

また、陸前高田市は震災を契機に全国各地とのつながりが多くなったため、遠い都道府県のナンバーもかなり見受けられる。当館の入り口にメッセージボードを設置しており、記載されている都道府県名を見ても、かなり遠くから来ている。

いずれはアンケート調査を実施し、何処から来て何処に行くのかを把握したいと考えているが、陸前高田市にそのまま泊まるというよりは、車で宮城県や県内の各地に行っている印象を持っている。

○ 物販について

(名須川晋委員)

東日本大震災津波伝承館に隣接する道の駅高田松原の物販の販売状況について、分かる範囲で教えていただきたい。

(熊谷正則副館長)

具体的な金額までは把握していないが、聞いている限りでは、来場者については既に10月末で12万人くらい来場しており、当館の来館者の2倍くらいである。それに伴い、売り上げも好調であると聞いている。道の駅高田松原は、陸前高田地域振興株式会社、農事組合法人の産直組合、広田湾漁業協同組合の直売所で、農産物と水産物の両方を取り扱っており、レストランを含めて好調であると聞いている。

○ 来館者からの要望等について

(小野共委員)

来館者から、施設や設備に対する要望や苦情のようなものはあるのか。

(熊谷正則副館長)

当館の造りがかなりこだわった追悼施設であり、シンプルでサインも統一されているが、ガラスが透明で自動ドアの入口が脇にあり、それが分からずにガラスにぶつかったりする方が開館当初は多くいたことから、現在はバリケードをしている。

トイレの男女の区別が分かりづらく、間違える方が多いため、サインを工夫する必要がある。追悼施設であることから、あえてベンチを置かないこととしているため、高齢者の方からは、ベンチや休憩する場所が少ないと言われている。

また、コインロッカーがあった方が良くと言われている。BRTで来館する方は、キャリーバックを持って来るので、持ったまま防潮堤まで行けないというような御意見もあり、公園全体の事務所とも情報を共有しながら、改善できるところは改善している。

(小野共委員)

そういう要望は、アンケート調査で把握したものではないのか。

(熊谷正則副館長)

観光物産協会のカウンターに常駐している職員や、当館の受付などでお話されたものを、毎日記録に留めている。

○ 館内の見学時間について

(佐々木朋和委員)

本日、我々も見学させていただいたが、映像と大きな被災物を見るだけで、ほとんど書いているものを読まないで回っても、40分程度の時間がかかっている。今日は、案内の方が付いていただいたが、一般の個人のお客様が見学している中で、そういう点での意見は何かあるか。

(熊谷正則副館長)

団体ツアーの方からは、30分で案内して欲しいとの要望が多い。その場合は、3.11シアター又はガイダンスシアターのどちらか一つのシアターを見て、大きい被災物を見て、最後にゾーン3の「教訓を学ぶ」を見るという、少し時間を短くした形が多い。団体ツアーでは1時間解説して欲しいという要望もあるが、途中立ち寄りの来館者は30分という要望が多いので、30分で効率よく理解いただけるようなプログラムを構築しながらやっている。

(佐々木朋和委員)

色々工夫をしながらやっていただいていると思う。私も、以前来館した時に展示物を読ませていただいた。ためになることが書いているし、この施設は津波を体験していない外から来た方々にも、教訓として何かを伝えることが役目であると思う。なかなか、読み込まないと伝わっていかない。津波が怖かったんだな、大変だったんだなと思って帰ってしまうのでは、学習としてはもう一步欲しいと思う。なかなか人は逃げないと書いてあったが、その部分が教訓ではないかと思うが、そこをもう少し来館した方に伝えるような仕組みがあれば良いと思った。

(熊谷正則副館長)

まさにそのとおりであり、津波の場合は、逃げる、避難、訓練、備えが重要であるので、

その辺の教訓は、水害の対策にも十分に応用できるところである。折角、解説員もいることから、展示物を見ていただいた上で、解説員が口頭で補足しながら上手く教訓を伝えていきたい。

○ 緊急時の避難場所について

(佐々木茂光副委員長)

緊急時の避難場所について、東日本大震災津波伝承館から何処まで逃げるのかという質問が議会でもあったが、その後、検討はされているのか。あくまでも、徒歩で避難すると報道されているが、どうなっているのか。

(熊谷正則副館長)

当館の避難場所については、陸前高田市の指導で気仙小学校になっている。ただし、現在、気仙小学校よりも手前にコミュニティーセンターを建設中であり、それが建設されると変更となる予定である。気仙小学校は、ここから2.1km離れており、徒歩で20分少しかかる。最終的に高田松原津波復興祈念公園ができる頃には、道路が整備され、もっと距離が縮まると聞いているが、暫定的に、現在は気仙小学校が避難場所となっており、訓練でもそのようにしている。

○ 伝承館の資料について

(工藤勝子委員)

東日本大震災津波伝承館を開館するに当たって、かなりの資料が集まったのではないかと思うが、どのくらいの資料が集まったのか。その資料をどのように生かしていこうとしているのか。

(熊谷正則副館長)

当館には、現在150点の展示物があり、それを作成するための映像、動画、写真等の情報がある。全部パネル類にしているので、そのためのデータ、ペーパーの書物は持っていない。全部、製作したもので納品になっているので、書庫もあるが、保存している文書などはない状況である。

(工藤勝子委員)

来館者は、約30分の時間で見るとのことだったので、展示物の記載事項を見る時間がないと思う。資料館として、消防自動車と橋げたがあったが、もっと生活に身近なものの現物の展示は考えていないか。

(熊谷正則副館長)

本日の説明するコースに入っていなかったが、道路標識や駅舎の看板などを、消防車の反対側に展示している。学校の楽器や文房具類など 10 点くらい展示している。定期的に入れ替えながら、現物の被災物を展示していきたいと考えている。まだ開館したばかりであることから、当面の被災物は、現在展示しているもので進めていきたいと考えている。

○ 伝承館の展示物について

(千葉絢子委員)

先ほど佐々木朋和委員からも御指摘があったが、逃げるという動機付けをするのももちろんであるが、我々個人や自治体関係者が出来るような備えというものも展示としては必要ではないか。昨年、神戸市の防災センターを視察した時には、実際に避難する時に、どれくらいの物を持って逃げるのかという物品の提示があった。減災にも非常に関わってくることであると思うので、防災という観点の施設ではないと思うが、ここを訪れてくれた方がどのように自分の防災意識を高めるかということにつなげていくのであれば、具体例の表示が必要であると思うが、いかがか。

(熊谷正則副館長)

御指摘があったとおり、備えの部分の具体の防災グッズなどの部分の展示は手薄なところである。この部屋が企画・展示・イベントルームになっており、土日に関係する方を呼んで講演会やワークショップを開催するなどの利用ができるので、そういったところで取り組んでいきたい。

道の駅高田松原では、入口付近に防災グッズを展示しているので、連携しながらやっていたら良いと考えている。

(2) 11月15日

○ 全国、世界へ伝える仕掛けについて

(工藤勝博委員)

各地で自然災害が起きているが、まだ対策が取られていない地域もあると思う。県外から視察に来る方の感想にはどういったものがあるか。

(熊谷正則副館長)

県外からの予約も徐々に入り始め、特に消防、自治体などの職員が多く訪れており、こんなに被害が大きかったのか、まだまだ復興途上である印象を受けたなどの感想を聞く。入口のメッセージボードには、ここで見たことを地元伝えていきたいなどのコメントも多く寄せられており、当館が事実と教訓を伝えるという部分で、貢献していると感じている。

(工藤勝博委員)

災害は繰り返されている。特に、東日本大震災津波は従来に無いとてつもない大きな災害であった。それらを他の地域の皆さんにどう伝えるかが大切だと思う。そういう点も含めて、どういう形で全国、あるいは世界に伝えていく仕掛けをしていくのか。

(熊谷正則副館長)

当館は国内外を代表する津波学習拠点を目指している。入口で配布しているパンフレットを全国の各市町村に配布してPRしている。また、ホームページを開設しており、Twitter、Facebookでも随時情報を発信している。今後もそういった色々な仕掛けをしながら、情報発信に力をいれていく必要があると感じている。

○ リピーターを増やす取り組みについて

(佐藤ケイ子委員)

オープンの時も見せてもらったが、多くの方々に来ていただきたいと思っている。道路も良くなり、沿岸に行ってみようという気にさせる施設だと思う。沿岸の復興の応援の力になれる施設ではないかと思っている。

こういう施設は1回見ればいいというものではなく、何年かに1回は行ってみようと思ってもらう施設でなくてはならない。追悼という意味からすると、楽しいイベントを行えばいいというわけではなく、難しいと感じる。リピーターを増やすやり方をどう考えているか。

また、応援の一環として、寄附や買い物をしていこうという気持ちが働くが、そこが弱いと感じる。他の県は買わせるのがうまい。岩手県民は遠慮がちで買わせる力が弱いという気がしている。来館者にお土産等をもっと買っていただけるような工夫ができないか考えるがいかがか。

(熊谷正則副館長)

リピーターについては、来館者には一回ではなく、何回も来てもらいたいと思っている。小

中高校に対しては、立花副館長を中心に、教育事務所の訪問や、校長先生が集まる機会にお邪魔し、当館のPRをしている。内陸方面からも中高生が来るようになってきており、そういった活動が継続できるよう、働き掛けをしていきたい。

静岡県で開発したHUGゲームという避難所運営ゲームがある。先日、大船渡市の赤崎中学校の生徒が来館した際に行った。当館の見学に加えて、HUGゲームや、避難訓練の避難路を実際に歩くといった体験をセットにしなが、特に小中高生の若い人向けに行っていきたい。

道の駅高田松原については、事務室も一緒であり、情報共有できる体制にある。開館時のポスターなども共同で作、県内の各道の駅で張るといった宣伝も一緒に行った経緯がある。当館を見学した後、買い物や食事をしていただく仕組みや、マスコミ、テレビを誘致するといった取り組みを引き続き行っていきたいと思っている。

○ 他の被災地への誘導について

(城内よしひこ委員)

この施設は東日本大震災津波の沿岸部のゲートウェイという位置づけであると認識している。他の被災地に誘導する取り組みがなされていると思うが、お聞かせ願いたい。

(熊谷正則副館長)

4月に解説員を採用し、沿岸全市町村を回りながら、それぞれの市町村の担当者、震災伝承施設の職員、語り部等から地域の状況を聞き取っている。その上で、各沿岸市町村のパンフレットを取り寄せて置いている。また、これからではあるが、週末に語り部に交代で来ていただくことを企画している。これまでに、大船渡津波伝承館の齊藤館長を招いている。また、陸前高田市で活動している、一般社団法人陸前高田被災地語り部くぎこ屋を招いて写真展と語り部を行っていただいた。当館で行うイベントにお招きして、ここから交流していければいいと思っている。特に、釜石市のいのちをつなぐ未来館はここから一時間もかからない距離なので、当館で沿岸全体の事実の教訓を学び、いのちをつなぐ未来館でさらに深い震災の取り組みを学ぶといった連携ができるようにやっていければいいと思っている。

(城内よしひこ委員)

現地に足を運んでもらうような仕組みづくりをしていただきたい。東日本大震災津波伝承館を目指して来た後、他の地域へ行きたい方に、案内等も含め、積極的に取り組んでもらえればと思うがいかがか。

(熊谷正則副館長)

解説員が10名いるので、あそこにはこういう施設があるなどの補足説明をしながら、他の地域の施設についても積極的PRしていきたいと思います。

○ 津波の教訓を活かした展示について

(斉藤信委員)

一番印象に残ったのは気仙中学校の避難の映像であった。東日本大震災津波の最大の教訓は、どれだけ早く高台に避難するかということである。その避難の経験、教訓をもっと押し出す必要があるのではないか。釜石市のいのちをつなぐ未来館は極めてコンパクトな施設で、目玉は奇跡と悲劇で、子供たちが早く逃げて助かった、防災センターで大変な犠牲を出したという二つのテーマとあっていいくらいで、ある意味わかりやすい。東日本大震災津波伝承館はそれだけにとどまらない。どうやって命が助かったのか、特に、子供たちは県内の学校では一人も犠牲になっておらず、県内全て学校で子供たちの命を守ったことは岩手の大変な教訓ではないかと思う。重茂半島の姉吉地区は、「此処より下に家を建てるな」という石碑があり、その教訓を守って助かった。吉浜地区もそうだと思う。逃げた教訓、いままでの津波の教訓を生かしたということの展示等にもっと力を入れれば良いと思うが、その点の展示の中身や反応について伺う。

(熊谷正則副館長)

気仙中学校の当時の校長先生、教務主任、生徒が出ている映像について、皆さん見てよかったと言っている。企画展示、土日のイベントで、例えば気仙中学校の当時の校長先生を呼んで講演会をするといった、当事者の方を呼んだ講演会なども企画していきたいと思う。石碑関係の紹介も積極的に行っていきたい。常設展示に加え、企画や週末のイベント等に取り組んでいきたい。

○ 避難路の伝え方と遺構の周遊について

(臼澤勉委員)

避難の在り方をどう伝えていくのかといったところで、東日本大震災津波伝承館は岩手の人に限らず、全国から来ていると思うが、仮に東日本大震災津波のような地震で津波警報が出たとき、来館者の避難についての伝え方をどう発信しているのか。どこかのボードに張る、ガイドが説明するといった部分はぜひやっていただきたい。

陸前高田市の復興のまちづくりには、東日本大震災津波の時に交通渋滞で避難できず、命を落とした教訓を生かし、高台への避難道路がまちづくりに仕組まれている。そういった道路の整備の在り方といったまちづくりの仕組みと仕掛けを伝えることが大事だと思っているので、御検討いただきたい。

(熊谷正則副館長)

避難路の説明については、団体予約の場合、エントランスの避難路の大きい地図の前で、最初に解説員から誘導の説明をしており、しっかりと今後も取り組んでいく。

(臼澤勉委員)

東日本大震災津波の伝承の遺構の周遊についての取り組みも、今後も継続してほしい。

○ 寄附の現状、アンケート調査の実施について

(田村勝則委員)

東日本大震災津波伝承館ができる前に、議会で議論になっていたが、私は少しでも来館者から入館料をいただき、有料で対応した方がいいという話をした。当面は入館料については無料とのことで、寄附の協力についてはパンフレットに記載があるが、現在の状況を伺う。

城内よしひこ委員も言っていたとおり、当館をゲートウェイにして各沿岸市町村につなげていくことは、非常に大事だと思う。今日、団体に来た方に声をかけたところ、東京から来ていた方々であった。そういった方々がどういうルートで行っているのかをしっかりと調べ、対応していくことも大事だと思う。入館者が何に一番興味を持ち、どういうことを知りたいのかというアンケートも行い、当館を運営していくべきと思うが、その点の状況について伺う。

(熊谷正則副館長)

寄附については、当館の出口に募金箱を設置している。開館の時から館内に設置し、ふるさと岩手応援寄付に寄附する仕組みになっており、10月末で50万円くらいになった。引き続き、団体客に募金箱の設置をPRしていく。

アンケート調査についてはまだ行っておらず、田村勝則委員からいただいた項目について調査を行いたいと思っていた。気仙沼市に泊まり、翌日の朝一番に当館を見て、その後、龍泉洞に行くというコースもあるとのことなので、調査しながら対応していきたい。

東日本大震災津波復興特別委員会現地調査【釜石市】

令和元年11月14日 15:00～16:00

11月15日 11:00～12:00

いのちをつなぐ未来館の取組状況等について

1 説明聴取、視察先

いのちをつなぐ未来館、釜石祈りのパーク

2 出席者

いのちをつなぐ未来館 館長 村上 清 (14日対応)

職員 菊池 のどか (15日対応)

3 概要

現 状 ・ 取 組 状 況 等	(いのちをつなぐ未来館) <ul style="list-style-type: none">今年3月に開館し、当初、1年間の入館予定を1万6千人としていたが、現在既に5万3千人の方に来ていただき、予想を大きく上回っている。要因は、三陸鉄道の開通が追い風となったことや、ラグビーワールドカップの開催、県内初の東日本大震災津波の伝承施設であったことなどが考えられ、県内だけでなく、県外、外国からも来ていただいている。しかし、三陸鉄道が台風被害により不通になったことで、来館者数に影響が出ている。ラグビーワールドカップは終了し、陸前高田市に県立の東日本大震災津波伝承館がオープンしたため、今後は厳しいと考えている。12月以降の見学の予約もあまり入っていない。冬場は交通の便も悪いこともあり、来館者数は減ることを予想していたことから、この期間を利用して、来年度からの対策を検討していこうと考えている。
質 疑 ・ 意 見 交 換	(1) 11月14日 <ul style="list-style-type: none">外国人の反応等について避難場所について展示内容について施設の今後について展示内容と今後の施設の方向性について (2) 11月15日 <ul style="list-style-type: none">来館者の感想について施設の運営の状況について施設の有料化について今後の取り組みについて

4 質疑・意見交換

(1) 11月14日

○ 外国人の反応等について

(高橋但馬委員)

ラグビーワールドカップの際に外国人の方も多く来たとのことであったが、施設を見た外国人の感想はどのようなものであったか。

(村上清館長)

映像や写真に、改めて衝撃を受けているようであり、津波の怖さを理解していただいたようであった。フィジーの女性でビールを持っているため入館を遠慮された方もおり、施設の趣旨を理解いただいているようであった。

(高橋但馬委員)

施設の至るところに外国人用のQRコードがあったが、どのようなものか。

(村上清館長)

先日、本格的に導入したものである。カナダの大使館に協力いただき、全ての文書を英語に翻訳している。また、パンフレットも英語版も作成した。

○ 避難場所について

(千葉秀幸委員)

津波で亡くなった方だけでなく、避難しても助けが来ず亡くなった方も多くいたことに驚いた。避難エリアが適切に周知されていれば防げたのではないかとも感じた。震災以降、避難場所も変わったかと思うが、それがどのように周知されているのか、また、周知がきちんとされているのか。

(村上清館長)

避難場所は、この近くの新しく建設された小中学校となっている。高台であるが、階段の他、車で避難するための避難路や、車いすで避難するためのスロープ、落下防止の柵なども整備されている。また、地域の住民への周知も徹底されていると理解している。

○ 展示内容について

(伊藤勢至委員)

もっとリアルな展示内容でもいいのではないかと感じた。映像や音響では、死に行く人はカットされている。個人の尊厳もあると思うが、本当の悲惨さを伝えるためには、死に行く人も映すべきであると思う。それがなければ本当の悲惨さが次の代に伝わっていかず、訴える力が

弱い。この貴重な体験を、子供たちに伝えていかなければならない。悲惨さを伝えるためには大人の目線ではなく、本当に子供が怖くて逃げなければならぬと感じる展示でなければ、この先客は減るのではないか。訴える力が弱いと感じた。初めて来た人に津波の怖さのショックを与えるくらいの展示であるべきと思う。

(村上清館長)

映像については、陸前高田市の東日本大震災津波伝承館と比べてモニターも小さく、津波の怖さを伝えるには弱いと感じ、もう少し大画面にできないか、現在予算について市と協議している。

亡くなった方の映像については、様々な考え方があると思う。自身の体験を思い起こしても辛い。子供たちは震災時も自分たちの判断で逃げている。改善すべき点はあるが子供たちには十分な防災教育がなされており、効果があったと考えてもいいのではないか。

津波を経験した子供たちに映像等を見せることは、学校の防災教育においても、かなり心の面に配慮して行っている。亡くなった方の映像が必要かどうかは、様々な御意見を聞かなければならない。

(伊藤勢至委員)

子供が平然と人を殺す事件が起こっており、時代が変わってきている。それは、死について教えないからである。人が生まれてきた以上、死に向かっていることを教えなければならない。議論は様々あると思うが、血の色があるものを出さない時代だからこそ人の命の大切さを教える教育が必要であると思う。

○ 施設の今後について

(米内紘正委員)

陸前高田市の東日本大震災津波伝承館ができたことで、来館者が減るのではないかとのお話があったが、こちらの施設は、館長の説明に心を動かされるものがあり、それぞれの良さがある。ぜひ、陸前高田市の施設からこちらの施設に来てもらえるような流れを作ってもらいたい。館長の経験をぜひ、伝えてもらいたい。

(村上清館長)

陸前高田市の東日本大震災津波伝承館が開館するにあたって、当館の存在価値をどう作っていくべきか検討した。一番には地域に根差した施設としたいと考えている。現在は市内のいくつかの小中学校の防災教育に関係するものを展示しているが、市内全ての学校のものも展示して、お互いの学校の取り組みが分かるようにしたい。また、県外から来た方にも、この地域での教育を知ってもらいたい。

また、市内の小中学校には、6年間で必ず一度はここに来てもらい、津波についての学習を

してもらいたい。また、小中学校向けの学習プログラムを学年別に用意し、体験できるようにしたい。

震災ときに釜石東中学校の生徒会で防災教育を担当していた生徒が当館で働いており、体験プログラムを考えてくれているので、それを発展させていきたい。

○ 展示内容と今後の施設の方向性について

(千葉絢子委員)

発災当時、報道機関に勤めていたが、放送できる映像が少なかった。御遺体などの映像をそのまま展示するのは確かにはばかられるが、岩手県は、震災復興や津波伝承を美談にしようとする傾向もあるように感じる。津波の恐怖がどれほどかを視覚で確かに伝えていく必要があると思う。戦後生まれの世代は、戦争の恐ろしさも自分たちが見てきたものから想像するしかない。一方、子供たちにはしっかりと防災教育が行き届いているので、残酷なものを見せる必要がないという館長さんの考えも理解するが、本当に怖いものだという気持ちを子供たちにも喚起することも大切である。

広島市にある原爆の資料館が参考になるのではないかと考える。被害だけではなく、原爆によりどのような状況になるのかを写真でも出している。残酷だという意見もあるが、それを見た人は原爆に賛成はしないのではないかと。視覚的にインパクトがあるもので注意を喚起することを上手く活用している施設もあるので、一考の余地があるのではないかと感じている。

また、先程館長の説明の中で、保護者に引き渡せる子供がいる一方、迎えが来なかった子供もおり、一緒に泣くしかなかったという話があった。この施設は、防災教育の拠点として子供たちに接する先生方の心構えを、展示を通して伝えるということを生かしてもらいたい。

先日開催されたマラソン大会では、子供たちが実際に避難経路を走ったという報道を見た。そのようなものを施設が主催して、県内の子供たちを広く募り、避難経路をたどってもらうようなものに発展させることもできると感じる。

(村上清館長)

マラソン大会のようなものは、ぜひ検討してみたい。すでに釜石市内には韋駄天競争もあり、ゲーム的な要素を取り入れながら、避難することが当たり前になる意識を作っていきたい。それが釜石市の目標でもある。

また、津波の恐ろしさを伝えることについては、運営主体や教育委員会、議会等と相談して考えていきたい。

(2) 11月15日

○ 来館者の感想について

(城内よしひこ委員)

多くの方が来館されていると思うが、どのような感想が聞かれるか。

(菊池のどか職員)

当館には、町内会行事で来館される方、学校の先生で防災教育に取り組みたいが、何から手を付けたらいいのか分からず情報収集のために来館される方、観光で来館される方の三つのタイプがある。

観光で来館された方は、当時の状況を知ることができてよかったという感想が多い。

先生からは、釜石東中学校の当時の防災教育の内容を教えて欲しいという話が多い。来館した先生に後日連絡をすると、道が開けてきたとの感想をいただくこともある。

町内会行事で来館された方は、今台風が来たら何をすべきなのかという質問が多い。備蓄倉庫は誰に話したら見せてもらえるのか、高齢者が高齢者を運んで避難できるのかなど、生活の中で不安に思っていることを質問してくる印象である。

(城内よしひこ委員)

教育関係者のアフターフォローをされているとのことだが、何件くらいされているのか。

(菊池のどか職員)

10か月で60件くらいである。

○ 施設の運営の状況について

(田村勝則委員)

現在、職員3名で対応しているとのこと、予定より多くの来館者が訪れている状況だが、対応してみても感想を聞かせていただきたい。

また、入館料が無料とのこと、県内外の来館状況など統計はとれていないと思うが、もし分かるのであれば、その状況についても教えていただきたい。

(菊池のどか職員)

県内外の来館状況については、予約外の方については把握していない。

予約している方に限定すれば、県外の方が多い。今年はラグビーワールドカップがあったため、行政関係者が多く来館した。また、学校関係者も多く、特に花巻市の学校が多いと感じる。

また、3名での対応についての感想だが、ガイドが私一人ということもあり、大変だと感じることもある。特に予約が入ったときには休めず、子育てとの両立が難しい。

○ 施設の有料化について

(田村勝則委員)

このような施設は、学習施設であり、個人的には、有料化し、スタッフを充実するなど、運営費に使ったほうがいいのではないかと考えている。今後も、無料を継続する予定なのか。

(菊池のどか職員)

スタッフの間では、予約の方だけでも有料にできないかということをはいるが、当面は無料で運営する見込みである。

○ 今後の取り組みについて

(佐々木努委員)

この施設の管理運営をしている株式会社かまいしDMCとはどういった会社なのか。また、今後、取り組みたいことなどを教えていただきたい。

(菊池のどか職員)

株式会社かまいしDMCは第三セクターで、本社が釜石市魚河岸にあり、本社では旅行業などを行っているほか、指定管理も行っている。私たちはそこから配属されている。

今後取り組みたいことについては、震災学習として防災学習を行っている学校も多いが、震災が風化していく中で、震災のことを知らない小学校3年生より下の子供たちを対象に、震災について考えることができる防災教育を進めたいと考えている。